

「日本語教師としての専門性とは何か」を探る活動

日本語教育研究科 修士課程1年

中山真菜

1. これまでの自分を振り返って ―日本語教師に至るまでの軌跡―

この授業での対話活動を通して、自分のこれまでの人生を振り返る機会を得た。過去、現在、未来を繋ぐキーワードとして、私が選んだ入口の言葉は、「ゴスペル」と「日本語教師」だった。そもそも、どうして私はゴスペルに惹かれたのか。そして、どうしてそこから日本語教師を目指すに至ったのか。過去の自分を振り返る機会を得たことで、現在の自分が今後どのような日本語教育の実践を目指していきたいのか、その捉え直しができるように思う。

私がゴスペルに惹かれるようになったのは、中高生の頃、黒人の女性ボーカリストの音楽をよく聴いていて、パワフルな歌声に魅力を感じていたからだ。あんな風に強く生きたいと思った。思春期特有の、よく言えば感受性が強くて、傷つきやすい自分が嫌だった。そんな時に、何よりも私の心を勇気付けてくれたのが、黒人の女性ボーカリスト達の力強い歌声だった。苦しみの中から生まれた歌、そんな印象を持った。次第に、黒人霊歌であるゴスペルを聴くようになり、自分もゴスペルを歌いたいと思うようになった。

大学3年の時、姉の結婚を契機に、南アフリカでのゴスペル留学を果たした。現地では、数人集まれば、すぐに歌が始まった。本格的にゴスペルに触れ、自分の思いを歌詞に仮託して、感情の放出をすることで癒しを体験していたのだと思う。自分が癒されたいがために、ゴスペルを歌っていたのではないか。ゴスペルの歌詞が、自分の気持ちを語ってくれた。押し込めていた痛みを、表出させてくれた。歌いながら、泣けてきた。そんなことがよくあった。人は弱いままで良い、クリスチャンの友人から、そんな言葉ももらった。

南アフリカでは、皆にすごくよくしてもらったが、言葉の壁が辛かった。周囲はアフリカーンスやコーサ語、ツワナ語の世界。簡単な会話程度の英語しかできなかった私は、自分の気持ちをうまく言い表せずにはいたし、マルチリンガルの多い環境で、日本語しかまともに話せない自分が、とても惨めだった。道を歩いている途中、車の中から「China!」と叫ばれたり、白人だらけの教会で、居心地の悪い思いをすることもあった。日本人である自分を誇りに持ちたいと思った。マイナーな言語である日本語にも、誇りを持ちたいと思った。実際に日本語を教えてほしいという依頼はちょこちょこ受けていたし、私が日本語教師を志すようになったのは、ごく自然な流れだったのだと思う。

帰国して大学4年になり、私は日本語教師の職に就くためのステップとして、高校の国語教師になる道を選択した。大学を卒業したばかりの、社会人としての経験が浅く、教壇に立つことにも自信の無かった私は、常に「教師らしい自分」になることを意識していた。毎回授業を終える度に、「これじゃダメだ、私は教師として相応しくない」というような自己否定に襲われていた。生徒と一緒に寮生活を営んでおり、早朝から深夜まで生徒と隣り合わせの生活の中で、学校からは常に「教師としての規範」を示すことを求められていた。

校則の厳しい学校で、生徒は携帯電話の所持も禁止されていた。意に添わなくても、見つけたら取り上げる、スカート丈を直させる、そんな生活を3年半続けた。洋服を買い物に行っても、教壇に立つのに相応しいかどうかを基準に選び、地味で暗い色の服ばかり着て、装飾品も身に付けず、そしていつの間にか、自分らしさが、すっかり失われていた。そんな中で、生徒が部活動で全国大会を目指したり、大学受験に向けて進路に悩みながら勉強に取り組んでいたりする姿に、いつも「私も頑張ろう」と励まされていた。本当に、生徒と一緒にあって、歯を食いしばって生活していた3年半だった。

高校教師を退職後、日本語教師養成講座に通い、フィリピンに日本語教師として派遣された。フィリピンでは、赴任と同時に日研出願の準備を始め、同僚の教師のサポートを得て、無事に海外出願を果たした。大学院に進学すれば、進路の選択肢も広がり、日本語教師として経済的にも自立した道を歩むことができる。日本語教師としての専門性をもっと高めたい。そんな思いで出願を果たしたものの、合格通知を受け取った直後から、しばらく落ち込んでしまった。それは、自分一人の人生のためにどれだけ頑張っても、虚しいということを実感したからだった。より良いパートナーシップを築くためには、まず自分が自立しなければならないと感じていたし、精神的にも経済的にも自立することを目指して、自分のことで精一杯の日々を送ってきた。しかしその結果、人と向き合うことを疎かにしてしまっていたのではないか。家族や友人と過ごす時間を何よりも大切にしているフィリピン人の生き方に触れ、これからは、人と共生する生き方にシフトチェンジしよう、と思うようになった。

日研に入学し、細川先生の実践研究「考えるための日本語（個人と社会を結ぶ）」を履修し、それまで自分のテーマとして掲げていた「自立」と「共生」について対話する機会を得た。「個人と社会を結ぶ」というテーマが与えられた時点で、より良いコミュニティ（社会）を構成するために、個人が自立していなければならない、という考えを持っていたが、対話活動を通じて、「自立」は「共生」と切り離せないという認識に変容した。個人の自立を100パーセント求めようとしても、特に精神的な自立は、一生かかる。それを互いに支援し合う関係を築いていくことこそが、大事なのではないか。また、他者を必要としない「自立」ではなく、他者を介在し得る「自律」を求めることで、他者との関係性の中で、互いの自己実現を支援し合う「共生」を実現し得るのではないかと考えるようになった。共生の中に自律があり、自律の中に共生がある。自分のオリジナリティを生かすことが、他者をも生かすことに繋がり、相乗効果でカラフルなコミュニティを形成していくこと。それが「個人と社会を結ぶ」ことなのだと思えるようになった。

また日本語教師として、教室を一つのコミュニティとして見立て、言語教育の世界で「自律と共生」を目指すことが可能なのではないかという直観を得た。日研に入学し、日本語教師としての専門性を高めたいと思っていたが、日本語教師の専門性とは、理念を持つことだと捉えている。それでは、日本語教師としての私の理念は何か。教室参加者の「自律と共生」を目指した言語教育の実践を行いたい。その理念を修論執筆の過程で固めていく

こと。修論のテーマとして「自律と共生を目指した言語教育の構想」を掲げながらも、なぜ私がそれを目指すのか、自分の理念に繋がる「日本語教師としての専門性」について、もっと考えを深めたいと思った。以上が、私の対話活動のテーマの設定動機である。

2. 対話報告 —日本語教師としての専門性とは何か—

〈対話報告1〉

対話活動として、私は日本語教師養成講座を受講していた時に、お世話になったS先生へのインタビューを試みた。実際に教師研修に携わっているS先生が、教師としての専門性をどのように捉え、養成講座を担当されているのか、お話を伺いたいと思っていた。

S先生とは養成講座時代に知り合い、現在私は母校である養成学校に併設された日本語学校で非常勤講師として勤務しているため、養成講座の学校説明会等で、S先生とお会いする機会も多い。先日行われた公開ゼミナールでは、私自身も受講生時代の体験談を語るように依頼されており、その中でS先生もご自分の教育観を語られた。その後一緒に昼食を取りながら、「日本語教師としての専門性とは何か」というテーマで対話を行った。以下に、その一部を記す。

(S : S先生 M : 筆者)

004:S:学習者のニーズを的確に捉えることができるかどうか。そしてそのニーズに合わせて、ある学習時間、学習期間の最後の着地点が意識できているかどうか。その着地点から逆算して、今何をするか意識できているかどうか。そういう見通しが無ければ、専門性があるとは言えない。

005:M:コースデザインができる？

006:S:うん、コースデザインができる。だから、クラス学習の場合に、そのクラスのダイナミズムを活かせるかどうか。

007:M:あの一、協働的な学び？

008:S:協働的？うん、そうだね。それも一つの学びの形だと思うけど、クラスのメンバーを活かせるかどうか。色んな活動したりする時も、ピアで何かする時もそうだけど、メンバーが、自分の意見をいっぱい持つてる人たちが、ただ日本語を覚えるだけじゃなくて、アウトプットできるような形で、自分を出していけるかどうか。

009:M:はい。

010:S:だから、いつも教師がみんなに教え込むことだけに目を向けていたら、相手誰でもいいわけじゃない。相手に合わせて、それが活かせるかどうか。メンバーを活かせるかどうか。色んな考え方とか。それからもう一つは、本当の力を付けていくための、えっと一、なんだ、あの一、4技能を確実に伸ばすために、計画性があるかどうか。

011:M:はい。

012:S:で一つ一つの技能について、例えば、今日は聴解やると、そしたらその聴解っていう

のが、ただテープ流してマルバツしてオッケーって終わるんじゃなくて、聞いたことによって、その人が、どこが分かんなくて聞けなかったのかとか、何の能力が不足してるから、そこが分かんなかったのかとか、そういうフィードバックが的確にできなければ、ただただ時間が流れていだけになってしまうから、だからフィードバックができるかどうかだね。色々な技能において。それから、もっと基礎的なことと言えば、段取りよく教えられるか。教師だけがしゃべってて、学習者がただ聞いている、っていう風なのじゃなくて、段取り持ってやれば、発話がどんどん増えると思うのね。でその、学習者の発話を増やす工夫が、常時行われているか、かなあ。

013:M:う～ん。

014:S:後は、何だろう。ノルマに追われているようなカリキュラムじゃなくて、その中に、何かの活動を入れることで、飛躍的に伸びるってことがあると思うのね。そういうことを、計画的にできるか。活動、アクティビティ、総合活動型でも良いけれども、今まででは、細かい点ついて、ここが悪い、ここがって、そういう風に、細かい所を見てフィードバックっていうのも、大事だけれど、今度はそこをポーンと枠を外して、助詞間違えようが何しようが、とにかく自分の言ってることが相手に伝わるかどうかっていうことを、実地にやってみるような、そういうチャンスを与えたかどうか。

015:M:あ～。

016:S:自分がその、目標言語である日本語で、事実を述べるだけでもいいよ。事実報告でも良いし、意見でも良いし、あるいはちょっと大きくするとスピーチでも良いし、何かそういう風な自分を出せるものがあつたか、みたいな感じかな。これがたぶんいつも私が心掛けてやっていることで、それで、えっと一、専門性、専門性…。

017:M:これら総合的なもの？

018:S:よく言われているような教師主導じゃなくて、学習者主導っていうのが、これだと思
うのね。学習者主導っていうのは、学習者に教え合わせるとか、発表を聞かせ合うとか、
学習者同士が討論するとか。教師として、教師として与えることと、それからそっちの
学習者同士が学び合うことと、それがうまくいくようなコーディネーター、ファシリテ
ーターみたいな役割っていうのが、必要だろうなって思う。だからそのためには、教師
は情報も持つとかなないといけないし、学習者にも情報を得る力を与えなきゃいけない。
待って、これくらいしか今んとこ言えない。

019:M:はい！ありがとうございます。あの、私が最近考えてた専門性、大学院に入ってから
考えるようになったのは、自分なりの理念っていうか、外にある理論ではなくて、自
分の中のビリーフを固めていく、というのが専門性なのかなって、すごい抽象的なこと
ばっかやってるんですけど、それで最近レポート書きながら思ってたのが、あの、何だ
ろう、日本語教師らしい教師を目指すんじゃなくて、何て言うか、自己実現、日本語教
師の仕事で自己実現を果たせるっていうか、自分らしさを発揮できるっていうか、総合
とか、学習者主体なんだけど、それプラス、教師も主体っていうか、うーん、なんか、

そう思って、あと、何か、教室で、学習者の評価観点、評価項目っていうか、それが、何か、大学で指導受けてる先生の影響受け過ぎちゃってるところあるんですけど、自己更新力、自分を更新する力。

020:S:へ～。

021:M:学習者が、言語によるコミュニケーションとは、とか考えると、言語観とは、とか色々考えるようになって、翻訳的に自分の言いたいことを言うっていうよりも、言葉によって、自分が発見できるみたいな、なんかそんな、言葉のやり取りによって、自分のテーマが見えてきて言いたいことが分かってくるとか、自分の中で筋が通るようになったとか、なんか、その、そういう意味での自律っていうんだったら、それを支援し合う関係を教室の中に実現していくっていうか、そういう授業ができるようになりたいなあって思って、そのためにまず自分自身が自分のテーマを明確にしつつ、でもそれに固執しない。色んな人とのやり取りの中で、どんどん変えていけるっていうか、そういうこと、やってるんですけど…（笑）抽象的なことばっかやってるんですけど。

022:S:ふ～ん。難しいねえ。どこまで自分が見えるんだろうか、人は。

023:M:あ～、う～ん。何か修論も、先生に言われてるのが、あの、自分の何か教育観の変容とか、そういうものを見えるものっていうか、ポートフォリオ的な論文？

024:S:うん。

025:M:まだ日本語教育の中ではあんま主流じゃないんですけど、そういうものを書かされたって、思ってたんじゃないで、私もそういうもの書きたいなって思ってて、でなんか、例えば今後色んな配属先とかで働いた時に、その学校のやり方にも合わせる合わせるっていうんじゃないで、ぶれない軸みたいのを持てるようになりたいなあって思ってて、なんか、理念みたいなものを持つために、どうしたら良いのかなっていうことを、考えてて…。

026:S:う～ん。

027:M:でもそうなってくると、教師養成とか、育てるっていう発想自体が、あの、そぐわなくなるのかなあとか、その自分がもし、教師研修やりたいとか思ってるけども、そんなことも考えたりしてます。

028:S:たぶん難しいのは、精神的な側面と、本当の技術的な側面があるからなんだよね。技術的な側面無しにはあり得ない。ある意味、技術者みたいな。職人みたいなところがあるでしょ。職人で終わったら意味無いと思うのよ。職人だったら練習させればできるから。でもそれではうまくいかなかったから、今、見直そうとしてるわけでしょう、教育を。その時に必要なものって、メンタルな部分なわけでしょう。教師自体も変わっていくんだよ。学習者自体も変容していくんだよって言う目を持って流れになってきてんだよね。

029:M:先ほどの先生の体験授業の時にも、きちんとご自分の教育観を語れるって凄くいいなあって思って。まだ私、きちんと語れるまでいってないなあって思って。その、私の

教育観は、っていうのを、語れるって、その部分に、専門性、プロフェッショナルリティを感じるっていうか、プロだなーって。

030:S:うんうん。たぶん言葉って、算数とか理科とかとちょっと違って、脳みそに組み込まれてるって部分あるよね。文化もくっついてくるでしょう。そうすると、必ず専門家と違って持ってる考え方と、食い違いとかって色んなこと出てくるんだよね。でそういうことに気付けない人は、頭打ちだと思うよね。そこで変わっていけば、

031:M:気付けない…。

032:S:そう気付けない人は、たぶん職人で終わると思う。

033:M:うんなんかロボットっていうか、マニュアルを求めてしまうっていうか…。

034:S:うん。

対話というからには、S先生から一方的にお話を聞くだけではなく、私自身も自分の考えを提示する必要があった。S先生のお話の中で、「教師と学習者の関係」と「学習者同士の関係」というのが、気になるキーワードとして私の中に残っている。学習者に主体的であることを求めるならば、教師自身も主体的でなければならない。教師自身の主体性とは、どのような教室を実現したいか、という理念の部分に拠ると思うのだが、学習者が共に学び合う場を設計する中で、教師自身も変容していくことを受け入れられるような、共に教室を作る者としての「協働」の意識を高めることが、教師の役割として必要なのかもしれない。またS先生との対話で一致した結論は、養成講座で扱っている内容は「マニュアル」ではなく、そこにいかに自分らしさを発揮していくか、ということだった。日本語教師らしい教師を目指すのではなく、日本語教師の仕事で自己実現を果たせるように支援すること。つまり「教師らしい自分」ではなく、「自分らしい教師」になること。教師としての専門性は、理念を持つことだと思っていたし、今もその思いは変わらないが、その理念は、自分の生き方としての理念と一致したものでなければならないのではないのか。S先生との対話を通して、そんなことを考えるようになった。

〈対話報告2〉

次に、S先生と上記のような対話活動を行った後に、私が以前からお話したいと思っていた日研の同期であるHさんと対話を行った。Hさんは大学卒業後、まず中学で国語教師として勤務し、その後海外の日本語教育に携わっている。以下に、対話内容の一部を記す。

(H:Hさん M:筆者)

014:M:日本語教師の専門性について、Hさんのお考えを聞かせてください。私の考えはさっき言った通りで、自律と共生っていう、自分の生き方と、教師として目指すものが、一致していること。

015:H:そっかあ、でも私はまだなんか、やっぱり言葉…それもそうだし、だけどなんか、

言葉とは何かとか、言葉についての知識とかを他の人より持ってることなのかな、って
いうのはやっぱり消えないの。

016:M:うーん、まあでもそれは絶対そうですよね。それは外せないですよ。

017:H:うん。だからコースデザインの授業の時にね、その、2時間で5週間だけなの。日本語講座をどうしますかっていうことなの。だから10時間だけ。10時間しかない日本語講座で何をしますかって言って、「考える」みたいなことをやれ…

018:M:自分史を書くとかできないのかな。

019:H:あー、そこで、そしてお金も取って…

020:M:あー。

021:H:人も集めるとかっていった時にね。

022:M:うーん。

023:H:うーん。なんか日本語で自分史を書くっていう目的を達成するために、その講座に来る人ってどれぐらいいるのかなって思う。

024:M:確かに、確かに。うーん。

025:H:でそこで思いついたのが、料理学校とコラボして、日本料理作りながら、一回作ってみて、それを日本語で作ってみて、その過程みたいのを写真とかで撮って、なんかポートフォリオみたいに作っていく、とかっていうのを一応この前考えたんだけど。うーん。そうすると、日本料理を教えるんだったら、別に日本語を話せる人だったら、日本語教師でなくても良くなっちゃうじゃん。

026:M:うんうんうんうん。

027:H:だから日本語のネイティブと、日本語教師との区別をどこでするかって言ったら、言葉にどれぐらい意識的なのかっていうこと。

028:M:あー、それしか無いんですかねー差は。

029:H:とか教育っていうことをどれぐらい考えてるかっていうこと？

030:M:教育者の視点があるか無いか？

031:H:うーん。私ね、正直日本語教育って、そんなに…専門性が無い仕事な気がする。

032:M:え～だから待遇低いのかなー。悲しい！

033:H:うーん。なんか、ニーズで持ってきたんだと思う、今まで。

034:M:あー。

035:H:だけどそのニーズが無くなってから、その専門性とは何かって改めて言われると、ニーズに対応する教師は必要だったけど、ニーズが無いところで、日本語を学ぶ意義って何だとか、日本語教師の専門性は？って言われた時に、そんなに無い気がする。それを言うなら、国語教師の、っていうのは絶対無くないけど、日本語教師っていうのも無くないけど、今よりは確実に減るでしょ？

036:M:うーん。

037:H:うん。って思って。

038:M:なんか、危ういですねー日本語教師の道って。

039:H:うん。

040:M:すごい。

041:H:うん。

042:M:だから私は保険かけなくなるんですよね。

043:H:うん。

044:M:国語教師っていうベースがあって…。

045:H:たぶんそうだと思う。

このHさんとの対話活動を行った後、私はしばらく考え込んでしまった。日本語教師としての専門性を高めたいという思いで、大学院への進学を決意したものの、そもそも「日本語教師」という存在自体は非常に危ういもので、そこに専門性を求めようという働きかけ自体、無為なことなのではないか。自分の将来の進路を考えた時にも、「外国人に日本語を教える」仕事に、どれだけ自分がプロ意識を持って関わっていけるのか。東京で生活するようになり、異業種の方と接する機会も増えたが、その度に、「日本語教師」である自分の存在意義についても社会的な文脈の中で考える機会を持つようになり、自分はこの仕事でどのように社会と関わっていけるのか、軽い混乱状態に陥っていた。日本人にも日本語教育は必要である、という意識の中で、必然的に「国語と日本語の連携」のようなことを考えてはいたが、そもそもそれは、日本語教師の仕事に対する不安から来る発想だったのではないか。そんなことを考え始めていた。

〈対話報告3〉

上記の対話を行った後、再びHさんと対話を行った。

003:M:教師の専門性は無いっていう話だったじゃないですか？

004:H:でもやっぱり見つけました。

005:M:えーそれ聞きたい！

006:H:日本語のことばを覚えてもらうことが、すごく大事な、日本にとっても世界にとっても大事なことだっていうことを知ってる人です。

007:M:それが日本語教師の専門性？

008:H:うん。

009:M:なんか、私の場合、自分のこういう実践を目指したいっていうことと、あと自分がこういう風に生きていきたいっていう、そういう理念が一致してるっていう、こんな風に人と関わって生きていきたいとか、そのためにこういう自分でありたいとか、その部分が、それを、実現、こういう学習者を実現させたいっていう、教育としての理念とが、一致してるっていうことに、専門性があるのかなって私は思っていて、生涯かけて

やれるっていうか、差が無い状態。

010:H:でもさー、その理念って変わるんじゃない？変わらないの？

011:M:変わっていくもので良いと思います。

具体的な結論を出すような対話には至らなかったが、「日本語教師の専門性」に対するそれぞれの思いを語る中で、日本語教育に携わる者として「日本語を教える」ということが、自己実現に繋がり、それが社会に還元される類のものである、という点では合意が取れていたのではないかと思う。私の目指す「自律と共生」とは、自分を生かすことが他者をも生かすことに繋がり、「個人と社会を結ぶ」活動そのものであると認識している。言語教育の実践の場で、いかにしてそれを実現し得るのか、自分の中の閉鎖性の中で語るのではなく、多角的な視点を持って構想していきたい。

3. 私にとって「ことばの市民になる」とは何か

この問いに答えるためには、まず「ことば」というものを、私自身がどのように捉えているのかを説明しなければならない。語彙や文型の知識を積み上げていくような言語習得を目的として、「ことば」を個人の外側にある対象として扱う場合、「ことばの市民になる」とは、例えばドイツに留学した日本人の学生が、徐々にドイツ語をマスターし、ドイツ語圏においてドイツ語話者とのコミュニケーションが可能になり、そのコミュニティでの市民権を得る、といったイメージである。しかし、私がこの授業での活動を通して考えたことは、そもそも「ことば」とは、他者との対話を通じて見えてくる自らの固有性、自分は何を考え、何を言いたいのか、また自分の気付かなかった内面に気付かされる、というような、自己発見や、個人のアイデンティティが形成されている過程で、同時進行的に獲得されるものではないか、ということであった。その意味で「ことば」を捉えたとき、「ことばの市民になる」ことの意味がまた違った色彩を帯びる。「考えるための日本語」のクラスが開講され、教室の中で初めて出会った私たちが、お互いの「過去、現在、未来を繋ぐテーマ」について語り、その中でコミュニティとしての自覚を高めていった。自分のテーマを追究するばかりではなく、メンバーそれぞれが、自分のテーマを発見できるように、支援するような関係性が生まれていた。私は「ドンマイ」グループに所属していたが、「ドンマイ」という一つのコミュニティーを形成し、また参加していく過程で、自分の「過去、現在、未来を繋ぐテーマ」は明確になっていったように思う。

たとえば私の場合、「過去、現在、未来を繋ぐテーマ」として最初に取り上げたキーワードは、「ゴスペル」だった。しかし、「ゴスペル」から「日本語教師」にテーマが展開し、最終的には「日本語教師の専門性とは何か」というテーマで対話活動を行ったが、グループ内での対話を重ねながらテーマの変遷を辿る過程は、「ことば」によって自分の内側を掘り当てていく活動だったように思う。そして三カ月に渡る対話活動を終えようとしている今、帰国して今までやりたくてもやれずにいた「ゴスペル」を、再び始めることとなった。

1月に入ってから、本格的にレッスンを受け始めた。発声からやり直し、そのうち趣味でライブ活動等をして、歌うことを積極的に自分の人生の中に取り入れていきたい、と思うようになってきている。そのためにも、まずは本業である日本語教師で、しっかりと自分の専門性を高めていく必要がある。

私はこのクラスでの活動を、自分を開き、他者と対話する過程で、自分の内側にある「ことば」が引き出され、自己実現に向かうための後押しをしてもらった、というように意味づけている。教室の中でコミュニティを形成しながら、私にしか語り得ない「ことば」を獲得し、自分の目指す方向性を見据えていくこと。それこそが、「ことばの市民になる」プロセスそのものだったのではないかと思う。